

とよた ふゆ 日本の保母第1号 豊田英雄

〈弘化2年(1845) ~ 昭和16年(1941)〉

那珂市歴史民俗資料館



豊田冬は藤田東湖の妹雪子を母として水戸藩士桑原信毅の次女として誕生した。後年、那珂市東木倉から出た代議士根本正夫妻の媒酌を務めている。安政3年(1856)に母を、文久元年(1861)には父を亡くした。冬17歳の多感な時であった。翌文久2年、18歳で彰考館総裁豊田天功の長子小太郎(28歳)と結婚、前藩主斉昭(烈公・景山)の『景山女誠』を書写し、婦人の道と胎教の大切さを学び、家庭第一を心がけていた。

豊田小太郎は藩主斉昭から選ばれて蘭学を学ぶ一人でもあった。『論変通』を著し、偏狭な攘夷論を排して進取開国論を唱えていた。そのために身の危険を感じて水戸を脱し、京都に潜伏していたが慶応2年(1866)暗殺されてしまった(33歳)。22歳で未亡人となった冬は、小太郎が出立前に残した

「心を鬼にしておれ」(不屈の心を持て)との遺言を守り、英雄と改名して学問に励んだ。

世の中が落ち着いてきた明治3年(1870)、英雄は近所の子供たちに読書を教えはじめ、明治6年には水戸に全国初の女学校「^{はつおう}桜女学校(茨城県立女子小学校、現五軒小学校)」が開設されその教師に迎えられた。明治8年、東京に東京女子師範学校が開設され、校長中村正直(号は敬宇)から英雄は教師として招かれた。敬宇の門下であった根本正の仲介があったからと思われる。明治9年(1876)、敬宇は同校に附属幼稚園を併設し、その保母専務に英雄を登用した。日本の保母第1号の誕生である。ほとんどの園児は高位高官の子女たちであったが、英雄は信念を持って保育に当たった。その著『保育の栞』には、保母たるものはその保育法に習熟すると同時に、精神は「春霞のたなびく如く、常に爽快に」と説き、自身もそれを心がけ通した。

明治10年(1877)の西南戦争で廃れた薩摩(鹿児島)の人心を回復させるのは幼児教育からと県令岩村通俊は幼稚園の設立を決意し、その指導者として豊田英雄を招いた。藤田東湖の姪であることが薩摩の人々を喜ばせた。明治13年5月、英雄は大きな使命を果たして退任した。岩村県令には、「幼児教育で肝要なことは、外面に拘泥することなく真の性質を十分に伸ばし、想像力を広げさせることである」と建白した。薫陶を受けた保母の一人亀尾は、「いまよりは幼き子等が泣く声に幾たび君をおもひ出らむ」との歌を送別の餞として贈った。

明治20年(1887)、旧水戸藩主徳川篤敬^{あつよし}の駐イタリア公使赴任の随行を許された。任務は、ヨーロッパ女子教育事情の調査であった。イタリア・英国・仏国・スイスなどを巡り、とりわけ寄宿制度に感銘を受けた。

明治27年(1894)、東京で寄宿制の女学校「翠芳学舎」を開設し、翌年には宇都宮高等女学校の教頭として赴任、校風刷新を託された。明治33年(1900)、旧藩校弘道館に水戸高等女学校が創設され、英雄は翌年教師として迎えられ、歴史・地理・国語を担当した。明治36年には、開設された茨城女子師範学校でも教鞭を執った。やがて昭和3年(1928)、大成女学校の校長を最後に公職を退いた(83歳)。



「一事敢行」を貫いて幼児・女子教育をリードした英雄。昭和16年(1941)12月1日に97歳で逝去、水戸市谷中の常磐共有墓地(写真)に夫豊田小太郎とともに静かに眠っている。